



野辺地町子ども読書活動推進実行委員会だより

発行：野辺地町子ども読書活動推進実行委員会
(野辺地町立図書館内)

〒039-3131 上北郡野辺地町字野辺地 1-1

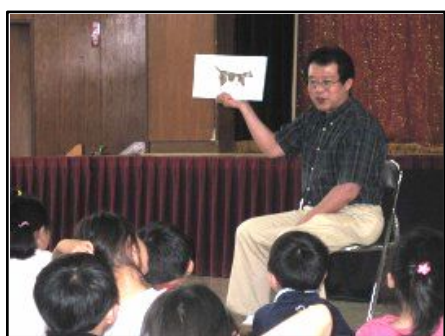
TEL 0175-64-2195

URL <http://www.jomon.ne.jp/~nlibrary/>

子ども読書活動推進実行委員会は、平成20年度地域子ども読書活動推進事業（青森県教育委員会委託事業）で、3つの事業を開催しました。①夏休み上北地方ワクワクおはなし会及び読み聞かせ活動団体等交流会（7/31）②ブックトーク研修会（9/26）③子どもの読書活動推進講演会&おはなし会（11/14）です。開催にあたっては、上北地方社会教育連絡協議会図書館部会との共催で開催し、上北地方のみならず県内の各地からも参加がありました。公民館のホールで開催した読書講演会やおはなし会には、約100名のみなさんが参加し、「質の高い内容だった」「おはなしの楽しさを満喫した」など好評のうちにすべての事業を終了しました。

事業の開催にあたっては、当町の3つのサークル、朗読の会「秋桜」、おはなしサークル「虹色の会」、絵本を楽しむ会「大きな木」が、主体となり司会や運営を行いました。

下記は、読書講演会とブックトーク研修会に参加した実行委員から寄せていただいた感想です。



「夏休みワクワクおはなし会」クイズ形式の読み聞かせに大盛り上がり！



「子ども読書活動推進講演会」講師は東京子ども図書館 荒井督子氏



「ストーリーテリングによるおはなし会」語りに聞き入るみなさん。

「メディアに囲まれた時代の母親として」 絵本を楽しむ会「大きな木」 代表 中山 玲子

どうして今、子供に本が必要なの？どうやって本に興味を持たせたらいい？疑問に思う私に荒井先生のお話は、とても参考になりました。読むおけいこのために本を読んでいるのではない事。子供達の読みたいという気持ちを起こすためには、水先案内人となる大人が必要である事。きちっとした日本語で書かれた質の良い本来のものを選ぶ選書が大事であること。子供達を観察し、今興味関心がある事に耳を傾け、しっかり向き合う事。テレビやゲームでは得られない想像力を養うために本が大変重要な役割を担っている事…。

想像して下さい。テレビが付いていても、ゲームが手元にあっても夢中で本を読む子供の姿を。子供たちに質の良い本を手渡し、喜びをわかち合い一緒に読んだ後の子供達の笑顔。理想の世界で終わらせず、現実に親子で本の世界を冒険してみませんか？

「ブックトーク研修会」 馬門小学校 教諭 今田 道子

9月26日に野辺地町図書館で行われました「ブックトーク研修会」では、9年間中泊町の小学校へ出向いてブックトークを行っている、長利佳代子さんの実演に感激しました。

子どもたちは、興味がないと聞いてくれないので、引きつけるために絵本や図鑑の挿絵、クイズ、実験などを取り入れる工夫をしているそうですが、テーマが「卵」では、酢漬の卵まで出てきて驚きました。

本の選定の仕方を尋ねると、まず自分が気に入る、紹介したいと思った本から、話をする子の学年にあった内容やテーマを選んでいるということでした。

本校でも全職員で毎月読み聞かせを行っていますが、ボランティアの「虹色の会」の皆さんの方が本に対する思い入れが強く、子どもたちの心に残っていることから、想いを込めて様々な本を紹介していきたいものです。

一度はぜひ、大人が読んでみたい「子どもと本・読書」について

深い感銘を受ける本のご紹介！



「読む力は生きる力」 脇 明子/著 岩波書店

今のこの時代になぜ、子どもにとって、本を読むことが必要なのか。子ども達が「本を読むこと」と幸せな出会いをするために、大人は何をしなければならないのか。読書の大切さを説く本は、数多くありますが、本書は、その根本において、心の底から納得できる著書といえます。長年、大学生を教え、「子どもの本の会」を主宰してきた著者が、長年考えぬいた成果を、具体例を挙げながら明快に語り、多くの読者の共感を得ています。また、続編の「物語が生きる力を育てる」は、絵本から本格的な物語へと移行する重要な時期に、なぜ昔話や民話ふうの物語がふさわしいのか、これらの物語に秘められているすばらしい力について説いています。



「クシュラの奇跡 —140冊の絵本との日々—」 ドロシー・バトラー/著 百々 佑利子/訳 のら書店

本書は、複雑な重い障害を負って生まれたクシュラとその家族の「生」との戦いの感動の記録です。その日々のなかで、クシュラは、絵本により豊かな言葉と広い世界を知り、3歳になった頃には、健常児をはるかに凌ぐ言語能力と得意の分野を持つに至り、心をも豊かにしていきます。絵本や読み聞かせの持つ力について実証された感動的なノンフィクションです。1980年度エリナー・ファージョン賞、1984年度日本翻訳出版文化賞を受賞し、長く読み継がれている本です。



「サンタクロースの部屋 —子どもと本をめぐる—」松岡 享子/著 こぐま社

「人は、いずれサンタクロースが誰であるか知る。しかし、幼い頃に、心からサンタクロースの存在を信じることは、その人の中に、信じる能力を養う。……。」アメリカの児童文学評論誌に掲載されていた1文から著者は、「心の中にひとたびサンタクロースを住ませた子は、心の中にサンタクロースを収容する空間をつくりあげている。……。」と述べます。子どもの頃に、サンタクロースを信じる事のできる体験があるのとないのとでは、心の成長に大きな違いがあると著者は説きます。子どもと本に長年かかわってきた著者ならではの含蓄のある言葉一つ一つが、心に染み入る名著です。

「家族ふれあい読書デー」(毎月23日)に家読(うちどく)を楽しんでみませんか？

家読(うちどく)とは？

授業が始まる前の10分くらいの時間を、全員で好きな本を読む「朝の読書」が全国的に定着してきています。当町の小・中学校では、曜日を決めて15分～20分を「朝の読書」の時間に当てています。

「家読(うちどく)」は、「家庭での読書」のことで、「朝の読書」で身についた読書の習慣を家庭に広げることを目的としています。また、読書の楽しさを知った子どもたちが、今度は家庭でも家族みんなで本を読むことをとおして、家族のコミュニケーションや絆を深めていこうとするものです。

家読にルールはありません。家族みんなで好きな本を読んで、本の感想を話してみましよう。同じ本をみんなで読んだり、お互いに本をすすめあえば、さらに会話が弾むことでしょう。家族そろって図書館や本屋さんで本を選ぶことも楽しいですね。

「家読(うちどく)」公式ホームページには、「うちどくガイドブック」で本の紹介をしています。小学校の低学年から高校生以上など対象別によるもの。子供たちが選んだ「家族で読みたい！」おススメうちどくブックリストなどの他、ユニークなテーマのリストが掲載されています。読んでみたい本が、見つかるかもしれませんネ！

